



森・人・海  
生命をつなぐ  
銚子川

日本にはまだこんなに美しい川がある！  
魅力・ときめき・伝えたい！

# 銚子川シンポジウム

Choushi River Symposium

平成22年10月2日(土) 13:30~16:30

会場：海山公民館

主催／紀北町、財団法人 自治総合センター  
後援／NPO 法人ふるさと企画舎、川づくり会議みえ、紀北町観光協会、きほく七夕物語実行委員会、交流空間みやま、銚子川漁業協同組合、便ノ山区、ホテルの会、三重県（五十音順）

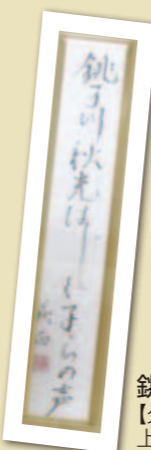
## 銚子川に関する作品 受賞者および受賞作品



きれいな銚子川 いつまでも  
【紀北町長賞】【銚子川シンポジウム賞】  
奥村 真有さん (11歳)



アユカケ見たよ  
【内山 リゅう賞】 泉 憲志郎さん (7歳)



銚子川  
【久 隆浩賞】  
上村 和代さん

「アユカケのイラスト」  
「銚子川」をテーマに  
した応募作品 (31名  
37作品) をロビーに  
展示しました。ご応募  
いただいた皆様、あり  
がとうございました。



キャンプ inn アユカケ  
【原田 泰志賞】 中村 知暖さん (9歳)



アユカケ  
【松場 妥賞】 濱口 航希さん (11歳)

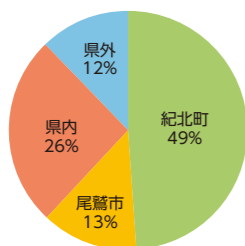


川のお祭り (馬越峠夏まつり)  
【上村 毅賞】 福山 美琴さん (3歳)

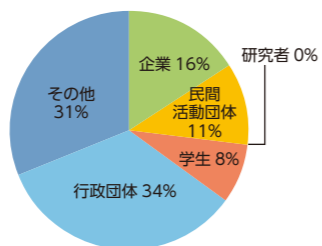
※銚子川シンポジウム賞は、来場者による投票の結果、84票中34票を獲得した奥村真有さんの自由作品(切り絵)「きれいな銚子川いつまでも」に決定しました。「すばらしい」「アユカケの表情が良い」「印象に残りました」などのコメントが寄せられ、紀北町長賞とダブル受賞になりました。賞品として図書券を進呈させていただきました。投票にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

## アンケート集計結果 (回答数: 121名)

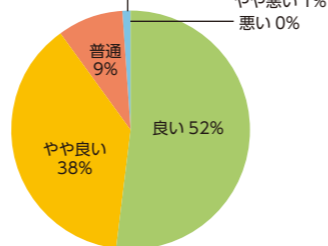
どちらからお越しですか？



あなたのご職業 (所属) は？



シンポジウムの感想は？



## ご意見

●水害のない地域にしたい。●昔遊んだ深い淵でもう一度遊びたい。●銚子川の良さを再確認しました。ありがとうございました。●たくさんの人に来ていただきたいけど、やはり汚染が気になります。●参加者が少なかった。地元の人をもっと参加すればよかった。●考えてみると、普段は水について議論する場が少ないと思いますね。●水をはぐくむ山(育林・治山)へも目をむけたらと思いました。●「環境保全」か「観光発信」か、どちらなのかピンときませんでした。●パネリストに女性も起用して欲しかった。●地元の人たちの思いが伝わってきた。●根本的に川を守るには、行政の力が必要である。その面の働きかけも必要である。●改めて一人一人の意識を高めることの大切さを感じた。●子どもたちの発表→大人が教え込んだのではなくて日常生活の様子を生の言葉で表していたのが良い。●会場には大きく正面に躍動する写真をかかげ、シンポジウムの席など日本の絞り染めの布をたらしたりするのも凝っていて良い。●生花も立派で華やかでよい。●内山さんの講演会の際にスライドに対して周りの照明がちょっと明るすぎて見えにくかった。●ゴミ問題、災害による土砂堆積など銚子川をめぐる話題があるが、やはり人々の川への関心の少なさが一番の問題であると思う。●関心が高まれば山林の荒れの事やダムからの流れを増やすなどにつながると思う。●少しでも川に流す水を増やすこと(利水は必要最小限)。シーズンオフの楽しみを増やすこと。●子どもたちの作品展や発表の場があったことが良かったと思います。●次世代へつないでいく意味で、こうしたシンポジウムに地域の子供たちが参加することは大変意義のあることだと思います。●(内山さんの)五感を研ぎ澄まして仕事をし、その実感に基づいた話は感動的。●TV番組を通じて銚子川を知ったが、とても素晴らしい川だと思ふ。●銚子川の魅力・大切さを再確認した。銚子川を守るために少しでも協力していただけたらと思う。※他にもたくさんのご意見・ご提案などを頂戴しました。ありがとうございました。

平成22年 12月発行

紀北町役場 産業振興課 商工観光対策室

〒519-3492 三重県北牟婁郡紀北町海山区相賀495番地8

TEL.0597(32)3905 FAX.0597(32)3172

URL.http://www.town.mie-kihoku.lg.jp/

このシンポジウムは全国モーターボート競走施行者協議会からの拠出金を受けて実施するものです。





## 開催趣旨

銚子川は、本州で最も年間降水量が多い大台ヶ原を源とし、熊野灘へと注ぐ全長約20キロの三重県南部の紀北町を流れる二級河川です。ほとんどが山間部を流れており、集落が少なく川の水はほとんど汚されることなく河口に至るため、下流域まで透明度が高いのが特徴です。河口では淡水と海水の境目である汽水域がゆらゆらと揺れて見える現象を観察することができます。この汽水域を『ゆらゆら帯』と呼び、透き通ったきれいな銚子川だからこそ見られる現象として大変貴重であるとされています。

近年、このような銚子川の美しさや、川あそびに最適な魅力ある川であることが認知され、シーズンには町外からも多くの人々が訪れるようになりました。しかし、中には心

無い人がゴミを残していたり、川の水を汚したりするなどの課題もあり、地元では清掃作業を行いながら、銚子川の保全と活用について検討しているところです。また、豪雨による川原への堆積土砂と河床の上昇、水枯れなど、川がやせ、荒れていく現状が日本のさまざまな川で問題となっていますが、銚子川も例外ではありません。

人々に恵みや豊かさ、自然の素晴らしさを伝えてくれる銚子川として、環境に配慮しながら楽しんでいただくにはどうしたらいいのか、どう守り後世に伝えていくのか。『ゆらゆら帯』が見られる日本の貴重な清流銚子川から全国に向けて、このシンポジウムで発信していきたいと思ひます。

## プログラム

第一部	13:30	開会・開会挨拶 紀北町 町長 尾上 壽一氏
	13:45	基調講演 「銚子川～清みきった美しい水から見てくるもの」 ネイチャーフォトグラファー 内山 りゅう氏
	14:30	休憩

第二部	14:45	子どもたちの発表
	15:00	パネルディスカッション 「川の現状と未来～銚子川からの発信」 コーディネーター 久 隆浩氏 (近畿大学総合社会学部教授) パネリスト 内山 りゅう氏 (ネイチャーフォトグラファー) 原田 泰志氏 (三重大学生物資源学部教授) 松場 妥氏 (銚子川漁業協同組合組合長) 上村 毅氏 (海山遊びの達人・紀北町職員)

## 開会挨拶

紀北町 町長 尾上 壽一氏



本日は、大変お忙しい中を、町内外から、多数の皆様にご参加いただき誠にありがとうございます。

「日本にはまだこんなに美しい川がある！魅力・ときめき・伝えたい！」と銘打っての「銚子川シンポジウム」を開催する

にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

ご承知の通り、わが紀北町は本州最大の年間降雨量で知られる大台山系の水の恵みを受け、熊野灘に注ぐ清流銚子川に代表される自然豊かな土地柄です。

今回のテーマは「森・人・海 生命をつなぐ銚子川」ですが、この地域に住む私たちにとって、あまりにも見慣れた風景で、上流の奇岩絶景の魚跳溪、河口の淡水と海水の汽水域に見られる「ゆらゆら帯」を含め、この誇るべき清流も当たり前のこととして生活してきました。

一方で近年、この銚子川の良さ、美しさが次第に近隣地域の人々のみならず、川遊びやキャンプ場に訪れる遠来の人からも次第に認められ、稀にみる魅力のあ

る川として評価を高めてきました。

ただ残念なことに、多くの人に愛され、訪れる人々が増えるにつれて、ゴミなどによる水辺の汚れが目立つようになり、水害による土砂の堆積などの自然の荒れに加え、人的な自然破壊も大変気になるところです。日本のさまざまな河川同様、今こそ、銚子川の保全や活用のあり方について真剣に検討すべき時だと考えています。

本日は、郷土の大切な自然遺産を後世にどう守り伝えていくのか、専門家の立場から識者の原田先生、久先生、この銚子川の自然をこよなく愛していただいています写真家の内山先生、いろいろな角度から実践的に取り組んでいただいている地元の有志の方々、それぞれのお立場から貴重なご意見をいただき、今後の環境や観光行政に活かしていきたいと思っています。

また、ご来場の皆様とともに、あらためて自然の素晴らしさを再認識し、それぞれの立場からどのようにこの豊かな自然の恵みを守り、活かしていくのかを考える場としたいと思ひます。皆様、本日はよろしくお祈いします。

## 子どもたちの発表



地元の小学4年生の子どもたちに「この夏何回銚子川で遊んだ?」「いつもどんな遊びをしているの?」と聞いてみました。

奥村慈温さん (左から2番目) : この夏 10 回以上銚子川で遊びました。7mぐらい上から飛び込みをしたり、ハゼ釣りをしました。エサはちくわです。シーカヤックに乗って「ゆらゆら帯」も見ました。下の水はしょっぱかった。

植村元稀さん (右から2番目) : 僕はこの夏7回ぐらい銚子川に行きました。飛び込んで流されていたりします。あと「ラムネ」もします。赤い銚子橋の南の方で大きなウナギが泳いでいて、捕まえようとしたけど逃げられた。

中西愛結さん (左から3番目) : 私もこの夏10回ぐらい銚子川で遊びました。「ターザン」や小さな魚をすくったりします。お兄ちゃんは「水面ダッシュ」をします。「水面ダッシュ」は男の子の遊びで、「ターザン」でロープにつかまったまま足をバタバタさせます。

田上さん (右端) : この夏は、舞込み淵で数え切れんぐらい遊びました。テナガエビを美味しく焼くのが得意です。子どもたちは食べたことがないということなので、僕が食べさせてあげます。

川井涼花さん (左から4番目) : 私はこの夏4回ぐらい銚子川に行きました。岩の上からジャンプをしたり、「ラムネ」をしたり、浮き輪で流されたりします。「ラムネ」とは、飛び込んで潜ったときに出る泡のことを言っているんだと思います。

福山さん (左端) : いきいき子ども学園の子どもたちと魚跳溪で「銚子川で初めて」の水生物調査をしました。三重県のマップに一番きれいなIV郡として掲載されて嬉しです。(調査の様子をスライドで発表した。)

## 会場の様子







Keynote address

## 基調講演

「銚子川～

清みきった美しい水から見えてくるもの」



ネイチャーフォトグラファー

内山 りゅう 氏

17年前、アユの写真集を出版するために紀州の川をすべて潜るなかで銚子川と出会った内山氏。その時の感動は今でも忘れられず、あまりの美しさに夢中で写真を撮り、写真集が出来上がっても銚子川の名前を伏せたほど気に入って、東京から紀州に移り住む理由の一つにもなったとか。『銚子川は大好きな川』という内山氏がこだわる【淡水】【世界の淡水】【銚子川】【銚子川の生き物】の4つのテーマに分けて美しい画像を使ってお話しいただきました。

### 【淡水】

地球上の全ての水の97%は海水。残りの2%は氷河や氷床で利用することができない。残りの1%を農業や工業などいろいろなものに使い、我々が飲める水はその半分もないと言われている。水は全ての生き物の飲み水になる。淡水は大事。

### 【世界の淡水】

淡水があっても我々に利用できる水と、利用できない水とがある。利用できない水は、広大な面積を占める氷河やシベリアの永久凍土。東アフリカのナクール湖やメキシコのチワワ砂漠に大小200ヵ所ほど湧出している水も、pH8度以上の強アルカリ。東南アジアの川は濁った水がほとんど。

利用できる水の例としては、ロシアのバイカル湖。世界の湖沼の水の1/4があるとされ、透明度が高く飲料水としても使えるクリアな水。世界で唯一の淡水に住むアザラシ：バイカルアザラシ、深海性のカジカ：ゴロミアンカ、水中にニョキニョキ立って水を浄化していると言われている海綿動物など、バイカル湖固有の生き物がある。日本では、涼しさや癒しを求めて川に行く。美しいと言われている川には人が集まる。東京では大勢の人が泳いだりバーベキューをして楽しみ、和歌山の美しい川では淵に飛び込む子どもたちの姿がある。

アムール川の上流は中国の黒竜江。4～5年前黒竜江で

化学工場が爆発した時、2～3週間後に大量の化学物質がアムール川に流れ着き、アムール川流域の人達は非常に怒り、その後も中国とロシアの間でいろいろとイザコザがあった。同じようなことは世界で起きつつある。ナイル川は10カ国、ドナウ川は17カ国と接している。世界紛争の火種になっているヨルダン川西岸も、もともとは川で起こった。世界中で人口増加に伴って水の取り合いが始まっている。日本には国境となっている川＝国際河川がない。こんな国は世界で稀。全部自国の中を流れているから国同士で水の利権を争うことに日本は関わることがない。あるエコノミストによると戦争が起きる理由は前々から言われており、水で紛争が起きる可能性が高いとのこと。20世紀は石油の世紀と言われた。21世紀は水の世紀。飲料水、農業・工業用水、我々が利用する水はすべて河川から取っている。我々が地球上で利用できる水は0.0001%しかない。少ない河川において、ものすごく少ない水で命をつないでいる。川は大事。

### 【銚子川】

日本は水が豊富。銚子川は本当に美しい。これは決して普通ではない。そのことを地元の人にぜひ知って欲しい。地元の人には美しい川を見て育っているので、これで普通、いつもあると思っていると思う。でも実は普通ではない。銚子川は別格。日本でも指折りのトップクラス。こんな美しい川が現代に残っているのは奇跡に近い。それを地元の人に気づいて欲しい。郷土愛として誇りに思っ

しい。「紀北町にはこの川がある、銚子川はすごい川だ」と声を大にして言って欲しい。

日本では一昔前の「水と空気はタダ」や、大量に使用することを指して「湯水のように」という言葉がある。日本には生水を飲む習慣があり、生水に対しての意識は非常に高い。海外では必ずボイルし、生水は飲まない。水が少ない海外に行くと「日本人は飲める水で風呂を沸かしては捨てるんだろ」と言われる。その飲める水でトイレも流す。今、世界の金持ちのステイタスは金やダイヤモンドではなく、飲める水で鯉を飼うこと。これ見よがしに庭に池がある。時代は変わってきている。

日本は湧水も豊富。富士山の伏流水の柿田川。京都の地下には琵琶湖と同じぐらいの湖があるとも言われる。また、これほど川が美しいのは日本ならでは。ヨーロッパの人は日本の川を見ると「滝だ」と言う。川の長さ高低差を見てみると、セーナ川やメコン川の長さは約1200kmあるが、高低差は約200mしかない。ゆっくりゆっくり流れていく川。日本は国土の2/3が山地なので普通の川でも河床勾配が急。一番長い川でも約400kmしかなく、約800mを起点として流れている。日本にはこうした川が2～3万本あるとされているが、そのほとんどが一気にガンガン流れていくので水は激むことがない。銚子川は長さは約20kmしかないのに高低差は約1000m。感覚的には滝。世界から見たら日本の川は流れが急峻でとても特殊。

雨が多いのも特徴。日本の年間降雨量は世界の約2倍。銚子川の源流である大台ヶ原は、その日本の年間降雨量の2～3倍ぐらい。淡水は雨でしか再生できない。雨が多いのは川にとってとても大事。

銚子川が美しい理由は、①雨が非常に多い②河床勾配が非常に急③生活排水が入っていないから。

「ゆらゆら帯」が見える場所は河口の近く。淡水の川に海の水が入ってくる。比重の高い海水が河床に沈む。この沈み込んでいる部分のことを「塩水クサビ」と言い、上が淡水、下が海水の二重構造になる。その境界部分がガムシロップみたいにモヤモヤしていて、これが「ゆらゆら帯」と呼ばれている。この現象は銚子川に限ったものではなく、河口部の勾配の緩やかな川であればどこにもあるが、これが見られるというのは川の水が格別に美しく透明度が高く、海の水も美しくなければいけない。河口の汽水域というのは人間の影響を一番受けている。生活排水などが流れ込んで、一番汚れている場所。汽水域の透明度がいい川なんてほとんどありえない。その条件が銚子川には整っているから「ゆらゆら帯」が見られる。とても稀なこと。

### 【銚子川の生き物】

国の鳥、国鳥とかあるが、国魚は何かと言われたら僕はアユじゃないかと思う。アユは中国大陸や朝鮮半島にもいるが、その分布の中心は日本。アユは万葉の時代から

も歌に詠まれていて、日本人と密接に結びついている。秋に産卵が始まり、稚魚は海に下り、また春、川に帰ってくるという生活史を持つものがほとんどだが、琵琶湖のアユは一生を淡水で過ごす。これとは別にほとんどを河口で過ごすアユもいて、シオクイとかシオアユと呼ばれる。これらのアユも産卵期には遡上すると思われる。銚子川は河口域がきれいだから、シオアユも「ゆらゆら帯」のところに戻ってくる。あちこちの川でいると思うが、もっとも観察しやすいのが銚子川だと思う。

カジカ仲間アユカケは、12～1月に産卵。子どもは海に行き、また帰ってくる。浮き袋と鱗がまったくなく、脱皮をする魚。「石化け」と呼ばれていて、じっとして通りがかった生き物をバクッと食べる。エラにトゲが4本あり、一番上のとがっているトゲでアユを引っ掛けて食べていたとされる。NHKの「ダーウィンが来た！」という番組でアユカケを取り上げた時にずいぶん観察したが、このエラのトゲで引っ掛けて食べるシーンは一度も見られなかった。しかし、地元漁師さんの中には「見た」という人が何人もいる。

レッドデータI Bに分類されるクボハゼを銚子川で見つけた。どこにでもいるハゼではなく、とても貴重なハゼ。かなりの数がいたということから銚子川の環境は保たれていると言えると思う。論文でも発表した。

他にも銚子川にはビリンゴ・ウグイ・ボウズハゼ・天然ウナギなどがたくさんいる。

きれいな川で獲ったメスのモクズガニの味噌は濃厚で格別に美味しい。一番好きなカニで楽しみにしている川の幸。テナガエビは同じような場所にいるがヒラテナガエビが流れの速いところに、ミナミテナガエビは流れのゆっくりなところにいる。どちらもなぜこんなに手が長いのか。テナガエビのメスは産卵の直前に脱皮するため、交尾のときには体が柔らかい。オス同士の戦いだけでなくメスを守り確保するために長いんじゃないかと思う。カジカガエルも万葉の時代から歌に詠まれ、美しい鳴き声を聞くために川へ行くなど、江戸時代まであった風情ある話がたくさんある。銚子川にもたくさんいる。一番多くなる夕方に聞きに行ってみようと思う。

(水中から山桜を撮った画像を見せながら)これは「お花見」と呼んでいる。日本人には水を愛する文化がもともとある。水に精神的な安らぎを求めるところがあり、淡水には海とは違う安らぎがある。

(銚子川の淵で泳ぎながら遊ぶ子どもの写真を見せながら)昔は川ガキなんていっぱいいたが、今では川ガキが絶滅危惧種になってしまった。このように川でエビを獲ったり川で遊ぶということを次の時代にバトンタッチする必要がある。今まで話したような水環境、美しい銚子川を未来の子どもたちに残すことが我々に課せられた義務だと思う。

基調講演



# パネルディスカッション

## 「川の現状と未来～銚子川からの発信」



久：まず自己紹介を兼ねて、銚子川との関わりを。

上村：銚子川は家から歩いて1分もかからず、物心ついてからの遊び場。深く関わり出したのは、平成10年に銚子川沿いにキャンプinn海山という町営のキャンプ場ができてから。役場からキャンプ場のスタッフとして2年間勤務。町外からのお客様に、地元の自分達には見落としがちな紀北町の貴重な資源や、PRでの情報の出し方など教えてもらった。最近、紀北町の豊かな自然を活かした体験イベントのスタッフとしてお手伝いしている。銚子川の魅力は、やっぱりなんといっても透明度。川岸からでも底にある小さな石まで見える。水中メガネで中をのぞくと、天然の水族館が目の前に。下流の汽水域では、満潮の少し前から川底に海水が溜まり始め、周り一面が白い絨毯をひいたようになる。海の魚がどんどん上がってきて、気がつけば満潮で川の中が海になっている。透明度を誇る銚子川ならではの。残念なのは、一般的に雑誌などに紹介されるきれいな川は一級河川で、銚子川は二級河川なので入ってこないこと。

松場：銚子川漁協組合長を勤めて13年。賞味期限が切れているかな（笑）。銚子川の美しさと魅力にとりつかれ、なんとか広めたくて、多くのみなさんに支えられてここまでやっている。子どもの時は川で遊び、魚獲りや水泳を覚えた。川は生活の場でもあった。教員になってから、川での遊びや魅力を少しでも子ども達に伝えたい・わかってもらいたいと思って、川と付き合い始めた。だんだん傷んできたりアユが見えなくなってくる中で、銚子川漁協という組織をバックにして、やれる範囲でやれることを続けていく。いつまでがんばれるかはわからない。（会場：笑）

原田：一番最初に銚子川に来たのは30年前。大学の3年生のとき沢登りで銚子川の岩井谷へ行った。沢登りではすごく有名な良い谷で、今日は中流以下の話ばかりだったが、上流のことも大事にして欲しい。20年弱前に三重大学に赴任。アユの研究をしている上司に「銚子川のシオアユを調査されてはどうか」と言って一緒に銚子川に来た。上流部や国道の淵のところからシュノーケルですーっと下って海まで行った。内山さんの話にもあったような光景に非常に感動した。自分では銚子川の研究はしていないが、アユなど海と川を行き来する通し回遊魚を数で扱うという商売で、理屈をこねるような観点から色々なことを考える上で、銚子川で見たことは印象深く参考になった。

内山：なぜ僕は紀伊半島に来たのか。やっぱり川がきれいだから。銚子川を除いて僕が紀伊半島で潜っていて良い川と思うのはいくつもない。その中でも透明度に関し

ては銚子川は別格。この川が汚れてしまったら紀伊半島に住んでいる意味がなくなってしまうんじゃないか、東京に帰ろうか、と思うぐらい。この川をきっちり見ていくことは僕にとってはとても大事。将来的にも写真を撮っていく上で大事な川。僕たちはいずれ死ぬ。次世代の子どもたちに興味を持ってもらわないと。子どもたちと川との付き合いが希薄になっている。もっと日本の川との接点を作ることが必要。それで写真絵本を作ってきた。これから子ども向けの作品やテレビ番組で、銚子川の「ゆるゆる帯」や日本の川を知って興味を持ってもらう。まず子どもたちに川に行ってもらえる機会を作ることが、僕の仕事の中ではすごく大事なこと。その中で銚子川は、僕の中で大事な位置になるとつくづく思っている。

久：銚子川の現状など感じていることは？

上村：平成16年の災害で川には堆積土砂が溜まり、川の表情は変わっている。個人的に一番好きなポイントも堆積土砂で埋まってしまった。しかし災害の中で改めて銚子川の魅力を再認識する機会があった。この地域に来てくれた人に「大切にしていきたい」「ふるさとみたい」と言われても、実は半信半疑なところがあった。キャンプinn海山を含む銚子川の災害復旧に、入れ替わり立ち代わり200人ぐらいのボランティアが来てくれた。本当に感動したし、ここに来てくれる方の思いや、この地域の魅力について再認識させてもらった。最近、銚子川にお客さんが増えるシーズンの、河原のゴミや持ち帰ることが難しい排泄物、上流部の路上駐車が問題となってきており、改善していきたいと思う。

松場：私が子どもの頃、大台系で採れる材木は、川で筏を組んで船津川や銚子川で流して運んでいた。相賀の駅裏、船津の駅裏から特別なプラットホームがあって木材と川の砂利を積み出していた。いつも川は手入れされ、水はいつも豊富に流れていた。その頃から比べると相当川は様変わりしている。山から大量の砂利が出て岩肌の上に溜まり、伏流水になってしまう。利水も多くなった。農業用水・工業用水・町内一円の飲み水。川を支えていくために、恩恵を受けているみんなががんばらないと「この川は死んでいく」と心配をしている。

原田：確かに砂利がすごく溜まっていて、変わってしまったという印象。しかし一番大事な水質は残っている。銚子川にはアユなど海と川を行き来する通し回遊魚が豊富。これらの魚にとって海と川が近くて水がきれいにつながって、移動が楽というのは大事。土砂については持ち出すという考えもあるが、時間を待たざるを得ないところもあると思う。待ちながら、残っている良いところを

## コーディネーター



久 隆浩 氏  
近畿大学総合社会学部教授

## パネリスト



内山 りゅう 氏  
ネイチャーフォトグラファー



原田 泰志 氏  
三重大学生物資源学部教授



松場 安 氏  
銚子川漁業協同組合組合長



上村 毅 氏  
海山遊びの達人・紀北町職員

活かしながらやっていると川じゃないか。また漁協の松場さんに産卵場の造成や保護など、新しい試みもされるということも聞いた。そういう積極的な方が漁協や今日のパネリスト、主催や一般の方でいるのが銚子川にとって財産のような気がして、何かいいなあ、と思った。

内山：台風の後、本当に砂利が増えたが全国的なこと。銚子川に限ったことではない。川が悲鳴を上げている。昔は大きい台風で掘り返されて淵が復活することがあったと思う。今は砂利が流れてきて淵が埋まって終わり。川魚も淵に依存して生きていくものと、瀬に依存しているものでは種類が違う。淵がなくなってすべてが瀬のようになってしまい、瀬に依存する生き物が増え、淵に依存する生き物はどんどん減っている。淵が復活してほしいが、人の手でやるべきなのか、原田先生が言われるように自然の力に任せて待つべきなのか、河川工学が専門ではないわからない。しかし水のきれいな銚子川でも少しずつ埋まってきているのが現状で、たぶん銚子川の一番の課題。

松場：この水害で、銚子川の二つの流れの両方の道が壊れたため、上流部のダムの取水口も修理できず、川は昔のままの流れになっている。それまで伏流水ばかりで、魚道を掘って川へ少しでも魚を上げようと努力していたが、努力しなくても水が流れるようになった。しかし今年で道の改修は終わり、取水口が修理されてまた水が取られる。嬉しいような悲しいようなこと。川は水が流れてはじめて川。水を流す努力は漁協だけががんばっても無理。多くの人たちの協力を得て、わかってくれる人を増やしていくことが大事。

久：私から内山さんに教えていただきたい。銚子川、日本で一番の川だと言っても間違いはないか。

内山：いや～、川というのは淵と瀬が連続し、河川形態ができる。もっと淵が、水があれば間違いなく一位。そこが砂利で埋まってしまっているの、ちょっと自信がない。限りなく一位に近い透明度はある。

久：ちょっと微妙な位置にあるのかな（笑）。いかに一位を守れるかがポイントと思い、あえて聞かせてもらった。では、今後の銚子川を考え、提案や希望は？

上村：銚子川を訪れるお客さんは年々多くなっている。このお客さんを紀北町全体で取り込んでいけるような仕組みを作っていければ。このシンポジウムをきっかけに、銚子川ほど透明度が高くきれいな川は他にはない、大切な川だということ、町内外、特に町内の人に再認識してもらえれば。ゴミなどのマナーの向上や、できれば川の保全や安全についても、みんなの協力のもと知恵を出し合って取り組んでいきたいと思う。

松場：銚子川漁協だけでやっていた清掃活動を広く呼びかけ

ている。だんだん増え、今年は13団体で70名の協力となった。銚子川を一夜だけ天の川に変えるという夢のようなイベント「きほく七夕物語」が3年前に始まった。銚子川を利用している団体の人達が、一堂に会して共通理解をお互いに深める「銚子川サミット」は年に2～3回開催している。そしてその発展がこの「銚子川シンポジウム」。こういう広がりや仲間を地域内外で増やしたい。

原田：たくさん人を呼ぶと言っても、駐車場の問題など、そう簡単にはいかないことがあるかも。銚子川は良い川なので川側で客を選ぶ。それぐらい傲慢になってもいいんじゃないか。アユ釣りも釣り人が多様化していて、あまり釣れなくても「きれいな天然の魚」を求めて来る。大きな川でもないのに、特化していくのも方向性としてアリ。どうやって実現するのかと言うと非常に難しい問題。できるだけ銚子川の魅力をわかってくれる人にだけ来てもらって銚子川を楽しんでもらう、というのがひとつの目指すべき方向かな。

内山：東京から色々な方が南紀に来て「川が見たいから連れて行ってほしい」というのが圧倒的に多い。彼らがやりたいことはだいたい決まっている。「川の水でコーヒーが飲みたい」。そんなささやかなことが東京の人はやりたい。東京にいる弟は、初めて来たとき「兄ちゃん、川にエビがいるよ！」（笑）都会から来る人は地元の人が「こんなこと？」「普通」と思うことでも感動する。僕は映像を通して本やテレビ番組などで銚子川の良さを伝えてきたし、これからもしていくが、それを受けて行動を起こすのは地元の人しかない。外から来た人がわかることと、地元に住んでいるからわかることがあると思う。僕ら外から来た人は好き勝手なことを言う。地元の人をそれを見て咀嚼して、自分の型で考えてもらわないといけな。今回、松場さんたちに会って、地元の人がこれだけ銚子川に誇りを持っていて、なんとかしたいという意気込みというか、熱いものを感じてすごく感動した。あとはマンパワーで地元の人たちが理解し合っていけば……。それがちょっと羨ましくもあり、良かったなと思った。

久：都会の人は、自然豊かなところに住んでいると「コンビニなんかなくても」と言う。地元の人「いや、コンビニも欲しいよ」。じゃあどうする？ → 中途半端なバランス → 魅力が薄まる、ということがある。少し時間はかかっても、紀北町の方々が銚子川だけじゃなく将来のビジョンとして、この町でどういう暮らしをするのか、みんな話して20年後30年後のことを考え始めてもらえたらありがたい。その第一歩をこのシンポジウムがきっかけにできたらな、と思って今日の締めくくりにさせていただきたい。